

マルコ4章24-25節 「注意して聞く」

1A 神への姿勢

1B 「同じ秤で量られる」

2B 「さらに与えられる」

2A 「聞く」ということ

1B この小さき者

2B 聞くことによる信仰

3B 信仰によらない「聞く」こと

本文

マルコによる福音書 4 章を開いてください、聖書通読はマルコ 3 章まで来ましたが、午後礼拝で 4 章を一節ずつ見て行きます。今朝は、4 章 24-25 節に注目します。「**24 また彼らに言われた。聞いていることに注意しなさい。あなたがたは、自分が量るその秤で自分にも量り与えられ、その上に増し加えられます。25 持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。**」

イエス様のところには、いろいろな人たちがやって来ました。最も多くいたのは群衆であり、そしてイエス様のすぐ近くには弟子たちがありました。そして、イエス様を批判的に見て、粗捜しをするパリサイ派や律法学者などの宗教指導者たちもいました。いろいろな人たちが混じって、イエス様の言葉を聞いている中で、イエス様は譬えを使って教え始められました。譬えは、だれにでも分かる話題であります。けれども、イエス様のことをよく知りたい、神の国について知りたいと強く願っている人々、真実に求めている人であれば理解はできるものの、そうでない人々は、その意味するところを解せず、ただのお話だけで終わってしまいます。こうやってイエス様は、全ての人に語りかける言葉を持ちながら、なおのこと弟子たちにはその意味するところの真理を伝えるという、同じメッセージで二通りの伝え方をしておられました。

その中で、イエス様が語られたのが「聞き方」であります。「**聞いていることに注意しなさい。**」ということです。

1A 神への姿勢

1B 「同じ秤で量られる」

聞き方によって、どのように変わるのか？それをイエス様は二通りに説明しておられます。一つは、「同じ秤で量られる」ということです。「**自分が量るその秤で自分にも量り与えられ**」る、とのことです。自分自身が、主の言葉に対してどのように判断するかによって、自分自身の定めを決める

ことになる、ということでもあります。主とその恵みと愛を受け入れ、この方を敬うのであれば、神は恵みを降り注ぐようにされますが、神を拒み、その恵みをないがしろにするのであれば、神は、神から離れたところで永遠に生きることになる、ということです。

聖書の神、天地を造られた神において特徴的なのは、その造られた人に対して自由意志を重んじておられるということです。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。(創世 1:26)」と言われました。天地を造られた神が、自由意志をもって生きておられるように、ご自分の似姿に造られた人にも、自由意志を与えられました。したがって、人が神に従うように強いらせることはできません。主は、善悪の知識の木について、それを食べないように、ということを命令することはできますが、それに違反することをやめさせることはできません。さもないと、人がロボットのように、自由意志のない存在になってしまうからです。それで、主は、「その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。(2:17)」と警告するのみとなっています。

ですから、人が神に背く時というのは、その結果は神がことさらに嫌がらせをして罰するのではなく、自分自身が神のすばらしさや慈しみ深さを拒んでいるにしか過ぎません。例えば砂漠の中で、神が水を与えと言われていて、「これを飲まなければ死にます」と言われているのに、そのように命令されるのは嫌だということで、飲まなければそのまま死んでしまうのと同じです。自分の判断や決断が、そのまま自分の定めとなるということを、イエス様は「同じ秤で量り与えられる」ということで教えておられます。

神はそのことを、何度となく人々に語られました。預言者が祭司エリに対して、こう預言しました。「Ⅰサム 2:30 わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられるからだ。」ユダの王アサに対して、他の預言者はこう語ります。「Ⅱ歴代 15:2 あなたがたが【主】とともにいる間は、主はあなたがたとともにおられます。もし、あなたがたがこの方を求めるなら、あなたがたにご自分を示してください。もし、あなたがたがこの方を捨てるなら、この方はあなたがたを捨ててしまわれます。」主は、一人一人がその心を広げる分だけ、その慈しみ、愛を注ぐことがおできになります。心を閉ざしている人に、無理やりこじあけても、そのことでもはや愛ではありませんね。そしてダビデが、詩篇で語りました。「18:25-26 あなたは恵み深い者には恵み深く、全き者には全き方。清い者には清く、曲がった者にはねじ曲げる方。」

主は慈しみ深い方です、全ての人に対して慈しみ深いです。イエス様が敵を愛しなさいと命じられた時に、「マタ 5:45 父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」と言われました。敵をも愛してくださる愛です。この愛に触れる時に、どんなに頑なな心も溶かされ、癒され、御霊によって清められます。神の慈しみによって、初めて人は悔い改めることができることを、パウロは論じています。「ロマ 2:4 神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導く」とあるとおりです。ところが、その慈しみを軽んじます。イエス様が十

十字架に付けられている時に、この方を罵り、あざける人が多かったのですが、悔い改めて、この方に救いを求めたのは、ほとんどいませんでした。十字架に共に付けられていた犯罪人のうち、一人が、私を御国で思い出してくださいとお願いしたのみであり、他の人で悔い改めた記録はありませんが、そのようにどんなに愛が示されても、それを軽んじる人々は多くいます。

そうであれば、その本人が望んでいる通りのことをしなければいけません。人が神に強いられるのではなく、神ご自身が人に強いられるのです。つまり、神は愛のゆえに、人がその愛を拒み、自ら神に裁かれるようにしないかぎり、神はその人を滅ぼしたくない、救われたいと願われているゆえ、裁かれることはないのです。裁かれるとすれば、自らが光のところに来ないで、自ら闇を愛するからに他なりません。「ロマ 2:5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」

地獄ということについて、人々には大きな誤解があるということがよく言われます。こうした会話を紹介すれば、ご理解できると思います。「天国に行きたいですか。」と尋ねると、「はい、もちろん行きたいです。」と答えます。「では、礼拝にいらっしゃいませんか？」と尋ねると、「いいえ、結構です。宗教や信仰のことはお断りです。」と答えます。それで、「天国には、では行かないほうがいいですね。」と答えます。理由は、「天国は、神の御子イエスが、すべての善の源として、あがめられ、たたえられ、この方にすべての人が仕え、礼拝していますから。」ということです。ある人が、こう言いました。「人生の中で神を一切拒む人にとっては、天国こそが地獄のような苦しいところ」です。イエス様がどんなにすばらしいお方かを私たちはあがめ、見つめ、そして共にイエス様にあって喜ぶところなのに、そのイエスは要らないと言うのであれば、イエスのすばらしさ、恵みを見ることのない場所に連れて行くしか方法がありません。自由意志を尊重すれば、そうなのです。

そこで、C.S.ルイスという人が、このようなことを言ったそうです。「最終的には、二種類の人がいることになる。神に対して『あなたの御心になりますように』という人と、神が『あなたの意志の通りになるように』と言われる人との。」つまり、「神を拒む人は、地獄で自分の願ったりかなったりのことを得られる、すなわち神が不在であること。けれども、神が全ての善の源だから、願わなかったことがやってくる。善の不在でもある」ということであります。¹人の多くが、神の良き賜物は欲しがるとは、その良きものの源は拒むのです。水は欲しがるとは、水の出る水道の蛇口は要らないと言っているようなものです。蛇口は要らないと言っている人は、水も要らないと言っているのと同じです。

2B 「さらに与えられる」

そしてイエス様は、「**その上に増し加えられます。**」と言われました。つまり、「**持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。**」ということ

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=8157>

す。「**持っている人**」というのは、神の恵みを持っている人ということです。神の賜物を受け入れて、永遠の命を持っている人ということです。神は、その受け入れた人には、惜しみなくご自分のものを注ぎ、溢れさせてくださることを願っておられます。パウロが、神の恵みについてこのように話しました。「エペ 3:7-8 私は、神の力の働きによって私に与えられた神の恵みの賜物により、この福音に仕える者になりました。すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、キリストの**測り知れない富**を福音として異邦人に宣べ伝えるため」である、とのこと。キリスト者になることは、ゆえに日々新たにされます。外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされます。キリスト者が若い時に持っているイエス様との関係が、その関係が成熟すれば、もっと新しくされており、イエス様のすばらしさがなおのこと見えてきます。ヨハネは福音書でこう言いました、「1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。」押し寄せる波のように、自分が恵みを受けたと思ったら、さらにこれまでにない恵みを受けます。そして、それがこれから後に来る世においても、続くのです。

「**持っていない人**」というのは、イエス様を持っていない人、永遠の命を持っていない人、ということです。持っている者までも取り上げられるというのは、自分は富があると思っていても、取り上げられてしまいます。金持ちの譬で、イエス様は、畑が豊作であった者がこれから何年分もいっぱい物がためられた！と言ったその夜に、「おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。」と言われます(ルカ 12:16-21)。そうです、その日に取り去られるかもしれない、そして死ぬ時には裸なのです。どんな財産もかの世に持っていくことはできません。自分は健康だと思っても、死という究極の病には打ち勝てません。以前、お話ししましたが、人にとって病が治ることは良い知らせですが、根本の良い知らせは死からの救いであり、死をもたらず罪からの救いだということです。持っていない人は、持っていると思っている富や命も、取り去られてしまいます。

2A 「聞く」ということ

このように、どのように聞くかによって、自分がどうなるかを定めて行くことになるのだと分かりました。では、イエス様の言われた、「**聞いていることに注意しなさい。**」ということに注目したいと思います。いかようにして、私たちは聞いていることに注意することができるでしょうか？

聞き方ということで、しばしばお話しするのが、飛行機の離陸前の案内です。飛行機慣れしている人であれば、それだけ、気にも留めないでしょう。最近では、面白おかしく案内して、なんとかして乗客が聞いてくれるように努力していることもあります。けれども、本当に恐ろしい乱気流に入ったり、または飛行機が故障しているのではないかとと思われるか、その時に改めて客室乗務員から案内があります。その時は、その案内の一言一言が、自分の命をつなぐものとして、必死になって聞くことでしょう。聞き方といっても、いろいろな聞き方があるということです。

1B この小さき者

イエス様が命じておられる聞き方は、云わば「小さき者のように聞く」ということです。先に、アダムに対する神の忠告について触れました。エバが惑わされ、アダムが罪を犯した時の誘惑というのは、「神のように賢くなる」とする善悪の知識の木から実を取って食べることでした。神の命じられることに、子どものようにして、自分の悟りに頼ることなく、従順に父からの言いつけのようにして聞くことを放棄してしまいました。悪い意味で大人になってしまったのです。それ以来、「自分の理解によつてのみ生きる」というように変わってしまったのです。

そこで、イエス様は何度となく弟子たちに、「小さき者のようになる」ことを教えられました。「10:15 まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」子どもは、純粋に聞かざるをえません。自分に力もないし、知恵もないですから、父また母の言うことに聞き従う以外に方法はないのです。もちろん、反発します。けれども、その反発とて限界があります。小学生に入るか入らないかの子が、「私は、両親に迷惑をかけたくないので、仕事を始めます。」なんていったら、とんでもないことですね。子どもは、従順にならざるを得ないのです。そして、私たち人間は、いつまで経っても神より賢くならないのです！神はいつも、私たちにとって父の存在であり、どんなに年老いても父は父なのです。ですから、自分の経験や知識があれば、それに拠り頼む誘惑がありますが、いつまでも幼子のように神に祈り、拠り頼むことを学びます。

2B 聞くことによる信仰

そして、信じるというのは、聞くことから始まります。「ロマ 10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」信仰というのは、聞くことによります。そして聞くことといっても、子供のように全面的に神を信頼して、従順な姿勢で聞いて行くということです。子供にとって、親の声を聞いて従うのはごく自然なことです。スーパーマーケットで迷子になって、お母さんの声が聞こえたら、泣きじゃくりながら一目散にその声の聞こえるほうに走っていくことでしょう。その時に、自分が信じているとおりに行動していることは、別に一生懸命、そうやっているからではなく、母親に対して全面的な信頼を置いているからです。

そのような人物にアブラハムがいます。アブラハムにご自分を啓示された神は、「エル・シャダイ（全能者）」としてご紹介されました。「シャダイ」は、乳房（シャッド）から来ています。エルは神ですから、乳房の神という言葉なのです。ここには、母に抱かれる赤ん坊のイメージが投影されています。それだけ、安心して信頼している姿が、全能の神の中には隠されています。アブラハムは、そのような信仰を持っていました。

だから、どこに行くのかも知らずに、示されたところに行きました。そして、アブラハムは妻サラが不妊で、年は七十を越えていたにも関わらず、子孫が夜空の星のようになると言われて、それ

でも神を信じました。その幼子のような信仰が、神に義と認められました。そしてイサクが生まれ、イサクが育ち、それからイサクを全焼のいけにえとして捧げなさい、と命じられます。創世記 22 章 3 節には、アブラハムがそのための準備をしている行動が書かれています。「翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。」ここの行動は、たっただと準備している様子が描かれており、迷いがありません。ヘブル 11 章には、アブラハムはイサクを屠った後に、神がイサクを取り戻してくださる、つまり復活を信じていたことが解説されています。これが、聞くことによる信仰です。その信仰は単に知的な作業ではなく、事実、行動に移す信仰です。ヤコブの手紙では、アブラハムの信仰が行いと共に働いたことを指摘しています。

こんな譬えもあります。非常に綱引きに長けた人がいます。ギネスに乗るような、高いビルの間とか、絶壁の間を綱渡りするとか、また大きな荷物を持ちながら綱渡りするとか、これまで何十回となく、そういった難関は一度も失敗していません。そして綱渡りの準備をして、人々の前で誰かがこう尋ねます。「彼が次も成功すると思いますか、そう信じられますか？」と尋ねると、全員が手を上げました。次に尋ねました、「彼があなたを背負いながら、綱渡りをします。だれか、彼の背中に乗って綱渡りをしたくありませんか？」いかがでしょうか？これが、数多くの人が信仰の一步を踏み出せない理由なのです。同意することと、信頼することの違いがここに 있습니다。信頼することは、頭だけでなく、全身を委ねることなのです。

3B 信仰によらない「聞く」こと

ですから、いくら聞いても、それが信仰に結びつかないことがあります。ヘブル書には、イスラエルの民がせっかく、エジプトから脱出したのに、約束の地に入る前に滅んでしまったことを取り上げています。こう話しています、「ヘブ 4:2 というのも、私たちにも良い知らせが伝えられていて、あの人たちと同じなのです。けれども彼らには、聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったのです。」そうなのです、数多くの人が聖書を読み、福音を聞き、それで理解できて、納得します。数多くの言葉を聞きます。けれども、もしそれが信仰に結びつけられなかったら、それらの言葉は無益になってしまうのです。みことばには力がありますが、それは信仰と共に働くのであり、信仰がなければ、神はそれでもご自分の言われた通り行われますが、自分のものにすることはできなくなるのです。

その妨げになるものを取り除かないといけません。それが、イエス様が 4 章で初めに譬えで語られたことです。土の種類で、みことばを受け入れる心の状態が書かれています。岩地に落ちる種は、「4:16-17 すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまいます。」とあります。試練があると、私たちはその時にこそ、自分の感じていること、理解していることに頼らずに、神を積極的に信

じるのです。それをしないと、つまずいてしまいます。

もう一つ、取り除かなければいけないのは雑草のような心です。「4:18-19 もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。」こちらは、誘惑です。試練が人生にとってマイナスの出来事、否定的な出来事であるならば、誘惑はプラスの出来事です。仕事が成功しているとか、お金がもうかっているとか、そういった良いことが起こると、富の惑わしを受けます。思い煩いが増えます。何か良さそげな話にいと簡単に頼ってしまいます。

こういったこと、つまり試練のようなこと、または誘惑になるようなことが心にあると、そのまま主に信頼することにおいて妨げになり、それがつまずきとなって信仰をもって聞くことができなくなります。それで、当然ながら行動にも出ることがなくなり、実を結ばせなくなるのです。ですから、私たちは心にあることを、聖霊によって調べていただかなければいけません。主に素直に信頼できないものがないかどうか？心に、何か悪いことが起こるのではないかという恐れがないか？あるいは、もっと楽しいことが世の中にはあるのに、それを奪い取られるのではないか？という恐れ。そういったものが示されたら、どうか勇気をもってそれを捨て去ってください。そうすれば、主が言われたことにそのまま応答することができます。聞き方に注意しなさいという命令に、そうすることによって初めて聞き従えます。